仙台を訪れる外国人観光客の拠点認識と観光行動の関係に関する研究

東北工業大学　学生会員　○幾世橋哲矢
東北工業大学　正会員　泊　尚志

１．はじめに

「明日の日本を支える観光ビジョン」[1]では，東北地方の観光振興を目的とする仙台の拠点化が提言され，現在各種取り組みがなされている[2]. 観光拠点に求められる機能の一つには，ゲートウェイや交通結節点として近隣の県・地域への波及効果が挙げられるが，そもそも観光客が拠点を設けているのか，また拠点の認識が実際の行動に与える影響についてはこれまで明らかになっていない.

本研究では，東北・仙台を例に，外国人観光客による拠点の認識と実際の観光行動の関係の把握に加え，先行研究[3]による目的地認識（訪れた地域の名前に対する認識）との関係に関する知見を得ることを目的とする.

２．調査概要

仙台を訪れる外国人観光客の周遊行動と拠点認識の関係を把握するため，外国人観光客を対象にアンケートを実施した．調査方法は，A4 版の調査票（両面）を用いて，街頭記入および即時回収とした．調査は 2019 年，12 月のうち計 4 日間に，松島，仙台城址，瑞鳳殿の計 3 か所で行った．調査項目は，出入国港，実際の訪問地（訪問順），各訪問地での宿泊の有無，各訪問地に期待していたこと，訪問地間の移動方法，拠点認識の有無，拠点認識地域，各拠点認識地域に期待すること，回答者の国籍，旅行の主な目的地，検討した目的地候補（旅行の目的地を決める際に挙がっていた他地域の選択肢），訪日回数である．回収数は 97 部であった．なお，調査票には英語，韓国語，中国語繁体字，中国語簡体字の 4 種類を用意し，回答者にはいずれか 1 種類を選んでもらった．回答者の国籍は台湾 33 人（34%），タイ 17 人（18%），米国 12 人（12%），豪州 10 人（10%），香港 7 人（7%），などであった． 参考までに仙台市内宿泊者数統計 [4]による国籍割合との比較をすると，本調査のサンプルの特徴として，中国，韓国のサンプルが少ないまたは全くないことや，タイやオーストラリアの割合が高いといった点があげられる（図 1）.

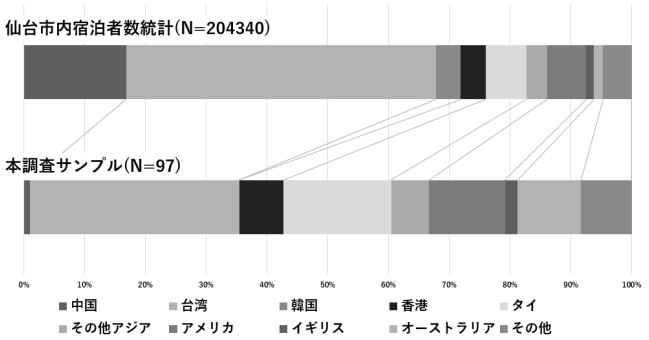

図 1　本調査サンプル，仙台市内宿泊者数統計国籍比較

３．調査結果と考察

観光客の拠点および目的地への認識と実際の行動との関係を把握するため，まずは本調査サンプルの周遊行動パターンを 7 つに分類し，パターンと認識のクロス集計表を作成した（表 1）．以下では，まずはクロス集計表をもとに基礎的な考察を行った後に，数量化理論 3 類を用いたグルーピングを行い，観光客の認識と実際の行動に見られる類似性を考察している.

表 1 から見られる回答の特徴として，仙台空港利用者の拠点認識は，「仙台」の回答が大半を占めることや，拠点を持たないという回答が一切見られない．また，訪問する地域の数によって目的地認識に一定の違いが見られた.

表 1 周遊パターンと目的地および拠点認識間クロス集計表

パターン	件数	目的地認識				拠点認識				
		仙台	東北	東北地方の仙台以外	東北地方以外の地域	仙台	東京	東北地方の仙台以外	東北地方以外の地域	なし
a. 仙台空港→仙台→東北地方の2ヶ所以上周遊する	18	7 (39%)	7 (39%)	4 (22%)	0	18 (100%)	4 (22%)	3 (17%)	0	0
b. 仙台空港→仙台→東北地方の1か所のみ訪れる	15	7 (47%)	1 (7%)	6 (40%)	1 (7%)	13 (87%)	0	10 (53%)	0	0
c. 仙台空港→仙台のみ	6	6 (100%)	0	0	0	4 (67%)	0	0	0	2 (33%)
d. 東京→仙台→東北地方周遊	14	6 (43%)	5 (36%)	3 (21%)	0	7 (43%)	8 (50%)	1 (7%)	0	3 (21%)
e. 東京→仙台以外の東北地方→東北地方周遊	18	6 (33%)	5 (28%)	4 (22%)	3 (17%)	5 (36%)	4 (17%)	3 (17%)	0	8 (44%)
f. 東京→仙台→東京	8	7 (88%)	1 (13%)	0	0	3 (38%)	2 (25%)	0	0	4 (50%)
g. 全国的な周遊→仙台のみ	18	9 (53%)	1 (6%)	2 (47%)	6	0	6 (24%)	0 (24%)	6	11 (65%)

キーワード　インバウンド観光客，観光拠点，仙台，東北
連絡先　〒982-8577　宮城県仙台市太白区八木山香澄町 35-1　東北工業大学　TEL 022-305-3533

● 数量化 3 類を用いたグルーピング

ここでは数量化理論 3 類を用いたグルーピングを行い，観光客の認識と実際の行動に見られる類似性を考察することを目的としている．そこで，観光客の認識と周遊行動に対する成分スコアの同時付置図を示す（図 2）．なお，本稿では「拠点」に対して焦点を当てており，一か所のみを訪れているパターン c および f を，拠点の議論における「はずれ値」として排除している．また，目的地および拠点認識に関する項目は四角，周遊パターンに関する項目は丸で図中にプロットされている．

まずは，図中右上に着目すると「パターン d」，「目的地認識：東北」，「拠点認識：東京」が近い距離にプロットされている．パターン d は東京から最初に仙台を訪れたのちに東北地方を 2 ヶ所以上周遊するパターンであり，この場合目的地は東北と認識される傾向が示唆された．また，その近くには「パターン a」がプロットされているが，パターン d と同様に東北地方を 2 ヶ所以上周遊しており，目的地を東北と認識する傾向が読み取れる．さらに仙台空港を利用しているという点で，仙台を拠点として認識する可能性が見られた．以上より，「パターン a」と「パターン d」，および取り巻く認識をグルーピングでき，共通点としてはこの 2 パターンにおける目的地認識は「仙台」より「東北」と認識される傾向がある点が挙げられる．

次に，図中右下に着目する．ここには「パターン b が」プロットされているがその近くには「拠点認識：東北地方の仙台以外」，「目的地認識：東北地方の仙台以外」がある．ここで，パターン b とは仙台と東北地方の 1 か所のみを訪れているということから，仙台ではなくもう一方の訪問地を拠点および目的地として認識する傾向があるということが示唆される．しかし，仙台には立ち寄っているため，移動面での機能を果たしていることが推察される．

最後に，図中左に着目すると，「パターン g」，「目的地認識：東北地方以外の地域」，「拠点認識：なし」がプロットされている．パターン g は全国を幅広く周遊する一環として仙台を訪れているパターンである．この場合，そもそも拠点を持たないことと，目的地としては東北地方ではない地域を目的地として認識する傾向が示唆された．

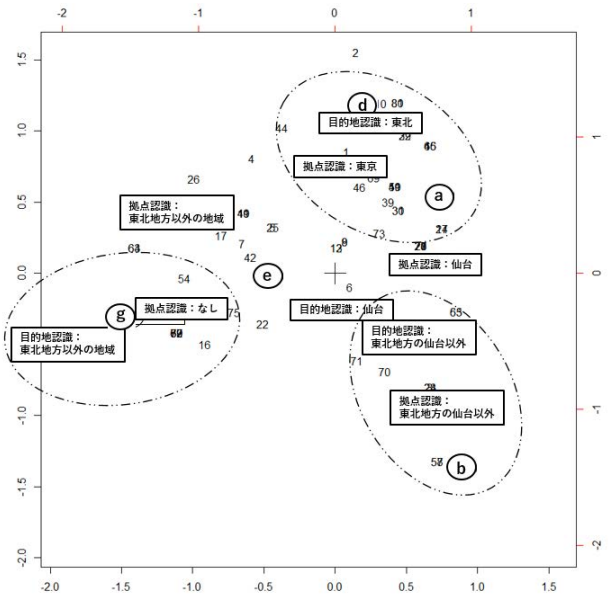

図 2 パターン c, f を除いた周遊パターンと認識の同時付置図

４．結論

本稿では，仙台を訪れる外国人観光客の目的地と拠点に対する認識と実際の観光行動との関係を把握するために街頭調査を行った．分析の結果，以下の点が明らかになった．

- 外国人観光客の周遊行動パターンと目的地および拠点に対する認識について，数量化 3 類を用いてグルーピングした結果，3 つに大別できた．
- 仙台を起点に東北地方を周遊する場合，目的地を「東北」と認識する傾向が見られた．
- 仙台空港を利用し，仙台のほかに東北地方の一か所を訪れる場合，もう一方の訪問地を目的地および拠点として認識する傾向が見受けられた．
- 全国を幅広く周遊する一環で仙台を訪れる場合，拠点を持たずに，目的地としては東北地方以外の地域を認識する傾向が示唆された．

参考文献

1) 観光庁：明日の日本を支える観光ビジョン（更新日：2016 年 3 月 30 日）
www.mlit.go.jp/kankocho/topics01_000205.html
2) 観光庁：仙台・松島復興観光拠点都市圏形成推進計画（更新日：2017 年 9 月 25 日）
www.mlit.go.jp/kankocho/topics04_000099.html
3) Tetsuya KIYOHASHI, Naoyuki TOMARI (2019), *Proceedings of the Eastern Asia Society for Transportation Studies*, Vol.12, 2019
4) 仙台市：市内外国人宿泊者数統計（更新日：2019 年 5 月 22 日）
www.city.sendai.jp/inbound/jigyosha/kezai/gaikokujin/toke.html